

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十五年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十卷第八号（通巻第一一六号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第116号

12. 2003

PDF制作

俳誌のsalon

ルミナリエ

品川 鈴子

ルミナリエ航海灯の目立たざる

土蜘蛛が耀糸を抛りルミナリエ

ルミナリエ波瀾も独歩にも慣れし

ルミナリエ時雨れの潦に映え



過ぎ来しを振向きがちにルミナリエ

過ぎ来しは只に華やぐるミナリエ

X'マス弟子の離反は知らぬ振り

旧居留地誘人灯のルミナリエ

地下道の騙し絵顧みぬ師走

撥ね橋の鎖検すも年用意



玉鈴

兵庫 長谷川 鮎

一族とわかる集団大聖樹
笑う泣く双子を抱きて大聖樹
クリスマス孫の電話に否言えず
くえさばき講釈ながき鍋奉行
冬靄に洋画の丘は水墨画

東京 長谷川登美

久に会ふ友の遅かり梅雨止まず
月下美人幼き記憶眠かりし
世も変り紅き花咲く朝顔も
面影の亡友に似し娘なつかし
雨降れば狭庭に霧の立ち込めて

兵庫 花房 敏

手折り度き心抑えて花圃を出る
衣着てバイクで馳せる盆の僧
耳近く秋の蟬聴き庭手入
朝顔の鉢入口に理髪店
天高し雄おたけび叫嬌声校に湧く

吟

東京 彦坂 範子

曼珠沙華野の篝火となりしばし
ふるさとの記憶まだらに曼珠沙華
曼珠沙華ひとつは母のために折る
夜の色一際ふかき曼珠沙華
奥津城の静けさあつめ曼珠沙華

千葉 福島 鶴代

サーファーに濤の一撃岬けぶる
ひとしきり涼を貧る奥白根
万屋の志野の茶碗と麦こがし
棲み古りし家に別れる銀河濃し
一才児の早や兄となる稲の花

愛媛 福田かよ子

峡の宿月を砕きて一人風呂
テトラポッド浪柱たて夏終る
文のびし稲の葉先に卍風
嘉門次小屋アイゼンはずし岩魚食む
ちびし鋳磨かれ並ぶ秋の夜

兵庫 藤田かもめ

食堂の葉罐ぴかぴか安居寺
幻灯の地獄の絵解き宵闇魔
尿まりせるダックスフント猫じやらし
幽霊の話が得意生身魂
金平糖舌にとろけて流れ星

大阪 藤田京子

風吹けば浮島揺らぐ未草
貴船川流れも早く川床しとど
蓮の精「青女の滝」の岩陰に
大踏の葉にもつれ飛ぶ夏の蝶
サロマ湖に青鷺一羽夕迫る

兵庫 史あかり

秋風もマイクに入れて薪能
立ち姿美しければ踊りなほ
くり返し九九復習ふ児に月明し
秋灯下速読味読よみ分けて
赤米を囲み明口香の曼珠沙華

愛媛 星加克己

点鬼簿の一枚めくれ秋の蝶
眼光の鋭き男雁渡し
声出して死亡記事読む秋の朝
一つづゝ諸を包みし古新聞
秋の少年川の面を石打てり

香川 細川知子

着ぶくれて金属探知器が鳴れり
年の市鳥獣戯画の包み紙
筆の穂の機嫌なだめつ賀状書く
大年の魚屋水で土間を掃き
水拭きのあとの空拭き年用意

兵庫 細野恵久

葉局の小棚に埋もれ日短か
初氷出すも貰ふも一筆箋
上寄せて大根の葉の瑞々し
湯に浮いて腰を出す柚子出さぬ柚子
除夜の鐘間合ひ思ひに従はず

薬草歳時記

(一一五) クリスマスローズ

大音悦子

クリスマスローズ蘭医の血筋にて

鈴山 実

赤紫と白のクリスマスローズが我家に送られてきて早や十年になります。毎年三〜四月頃可憐な花が咲き、送ってくれた神戸の友人に電話で様子を知らせたものです。今年は特別見事な花が沢山咲きました。なんの手入れもしないのに…と花に申し訳なく思ったほどです。

クリスマスローズはヨーロッパ生まれの花で、日本ではニガーとオリエンタリスの二種類があり、クリスマススの頃に咲き始めるのがニガー、オリエンタリスは三〜四月に咲くので春咲きクリスマスローズといわれています。

ニガーの学名はヘラボラス・ニガー (Helleborus niger)。ヘラボラスはギリシャ語で地獄の意に由来し、自生地が荒涼とした土地であることによりです。

イエス・キリストが生誕した時、ある貧しい娘が花を捧

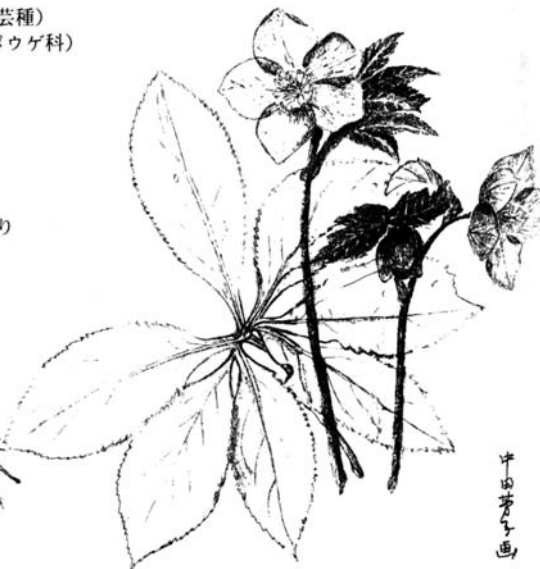
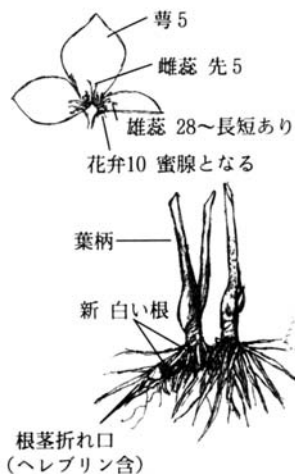
げようと思いましたが、一面雪ばかりの野に花などありません。しょんぼりしていると、そこへ天使が舞い降りてきて白い花を一輪くれました。それがクリスマスローズだったという言い伝えがあります。童話の一場面を見ているようで、美しく優しい神戸の友人の姿と思ひ合わせています。クリスマスローズはキンポウゲ科の植物で、キンポウゲ科の植物にはオウレン、テッセン、オダマキ、シヨウマ、フクジュソウ、トリカブトなど薬用植物としてよく知られた植物が沢山あります。

クリスマスローズの全草、特に根茎には強心配糖体のヘレプリン及びヘレプリゲニン、サポニン配糖体のヘレボリン及びヘレボレインなどが含まれています。毒性が強く、胃粘膜に炎症をおこさせ、心臓に対しては不整脈を起し、嘔吐、下痢をひきおこします。チンキ剤は心機能の正常化、精神病の治療にホメオパシー療法で用いられています。かつては強力な催吐剤、峻下剤、強心剤、麻醉剤として用いられていました。古代ギリシャ時代には頭をよくする霊薬として、劇作家や哲学者が服用したともいわれています。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

著者略歴 神戸薬科大学卒 薬局勤務薬剤師

ハルザキクリスマスローズ (園芸種)
 [クリスマスローズ属] (キンポウゲ科)
Helleborus Orientalis



中島芳子画

クリスマスローズ気難しく優しく 後藤比奈夫

クリスマスローズに遠く濤の音 青柳志解樹

珈琲はブラッククリスマスローズ 星野麥丘人

クリスマスローズの雪を払ひけり 長谷川 權

赦されぬ罪員ふクリスマスローズ 角田恵理子

クリスマスローズと童女かたことで 岩井 英雅

通るたびクリスマスローズの首起こす 田口 素子

クリスマスローズに柔らかき毒舌 須賀 悦子

クリスマスローズの傍で文を焼く 中島 節子

クリスマスローズ日脚を追ひ掛けず 細野 恵久

(めぐろっけ)

(めぐろっけ)

(めぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

夏風邪の鳥唱和すクラシック 大阪 角谷美恵子

夏少女こりこり歩くトウシューズ

横顔を見せて午睡の露天商

此所はみな米生りし地ぞ猫じやらし

肘つきて梨むく母や癌告げられ 兵庫 木村 美猫

守られて愚かに育ちぬ赤のまま

大腿に覚えなき痣残月忌

犬ころに恐いものなし吾亦紅

色見ゆるまで斑猫に近づきぬ 愛媛 田口たつお

道をしへ目にもとまらぬ速さにて

釘箱の釘に錆増え秋暑し

端正に並ぶ秋刀魚の長同じ

前に月見据えて峠登りけり 神奈川 山崎 辰見

名月や男振りよき猿のボス

居待月話は尽きず父母のこと

よき相の犬連れて出る良夜かな

語り部のさし出す麦茶香ばしき 兵庫 福島ゆき子

蚊帳吊草四角にさいて車待つ

秋の寺緑青帯びし釘かくし

芥なき浅野家の廟白き萩

青栗の際立つ森の風を受く 兵庫 武田 正子

トンネルと葛と交替交替に

冷麦をすすする最中人がくる

相鎚をうちつポキポキ日傘折る

姉妹と秋を語らふ父の忌に 兵庫 入江 和子

子を生みしこともあはあは鯛雲

通せんぼして蜘蛛の囀の自信作

呼び鈴に扉開ければ秋の風

石積みの七曲りダム青芒 兵庫 上原口チエ

鹿教湯宿枕の下で河鹿鳴く

写楽絵の団扇を選び帯に差す

寝返れば母の面影ちちろ虫

新米の御飯三粒でお食い初め 大阪 竹内 方乃

陶枕を母は黄泉迄持つて行く

園城寺梅雨に洗はる屋根の反り

惜春や裸一貫手術台

御手洗を手押しポンプで秋の水

標高九百風さわやかにティールーム

浦会所藩主もお成り秋の海

花岳寺の色変えぬ松枝八方

組分けの相談決まらぬ曼珠沙華

小言聞くふりに居眠り秋の空

昼の月光らぬ訳を聞きたがる

屋上の看板変えて芋煮会

採りしもの海へ返しに跣足の子

虫の墓小さき手型残りをり

吸ふ蜜の味いかならん秋の蝶

手術後の眼に色変えぬ松の有り

通夜出でて遠き日思ふ星月夜

地下足袋に負けん気を込め運動会

穴まどひ栗林公園滑り込む

落蟬が鳩の生餌になつてをり

病状の一進一退もどり梅雨

水鉄砲バケツ運びは口鉄砲

吾に向く銃身素早き水鉄砲

兵庫

四葉 允子

香川

井上 綾

兵庫

古井 公代

香川

田中真由美

兵庫

山本 怜子

振り売りの完熟トマト目で選ぶ

饒舌は庭へ流せと扇風機

傾斜よき瓦まくらに凌霄花

病む友へ筆の滑らず夏見舞

自転車で切る台風の余り風

袋持ち犬の散歩に夏帽子

夕立を眺めて部屋で竹を踏む

向日葵を絵に書く時は動悸なく

秋雷が轟く学童帰る刻

今日からは暗がり起きの松手入れ

清瀧の水は空より湧く如し

夏休み明ければ子らの塾話し

一房で充分の味葡萄狩り

贈られし句集ひもと繙く夜長なり

祝ひ述べ館長若し敬老会

錆びつきし廢線の跡花芒

星涼し大橋の陰重なりて

阿武隈の水育ちてふ胡瓜噛む

思ひ出は闇の向ふの遠火花

月下美人匂ひで気づく葬の夜

立ち話形壊れる雲の峰

京都

中崎 敏子

福岡

山口 和子

愛媛

安部美和子

石積知恵子

伊藤マサ子

伊藤 康子

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句 十五句 村上和子 //

* 選句は全て 品川鈴子

夏少女こりこり歩くトウシューズ 角谷美恵子

爪先を固く平らに作られた舞踊靴で、舞台の袖に少女が
出番を待つ。しなやかな脚運びを「こりこり歩く」と表現
し、トウシューズの材質感も伝わり、独特の擬音語が感性
にひびく。やがて舞台で浮かべる汗も清らかで、ほっそり
した少女の姿が彷彿とする。

大腿に覚えなき痣残月忌 木村 美猫

十八世紀末に峰崎勾当みねざきこうとうが作曲した地歌・箏曲ていぶつものの
門人だった大坂宗右衛門町の松屋何某の娘への追善のため
曲名も法名の残月に因む代表曲がある。死で潔白を訴えた
のか、覚えのない大腿の痣から、当時の乙女のひたむきな
哀れさを偲しのぶ。

道をしへ目にもとまらぬ速さにて 田口たつお

この道おしえは、名に恥じる憶病振り。余ほど身の危険

を感じたのか、なりふり構わぬ慌てようでもつしぐらに遁
走。俳句にしばしば登場する虫だが、大抵道案内してはか
りで、こんな滑稽な姿はかえって新鮮。

居待月話は尽きず父母のこと 山崎 辰見

名月を境に月の出がどんどん遅くなる。十八日ともなれ
ばなかなか待ち遠しい。久しぶりに集まった兄弟姉妹。雑
談から次第に年老いた父母のことへ話が移り広がってゆく。
父母を心から愛しいと思える齢になっても、兄弟姉妹が仲
良く集えることは人生最高の幸である。
(以下略)